

ポリオの会



代表
小山 万里子

東京都

ポリオに罹患し障がいを抱えている人たちが活動している当事者団体。ポリオ、ポストポリオ症候群（ポリオに罹患した人が、ポリオ発症から数十年後新たな手足の筋力低下、しびれ、痛みなどの症状が発現する）を発症していた小山万里子さんが、自分以外にも同じように苦しんでいる人がいるに違いないと、1995年に新聞の投稿欄で呼びかけ、活動が始まった。

主な活動は、現在、ポリオやポストポリオ症候群について知っている、又は診断できる医療従事者が少ないことから、情報やデータを提供し実情を伝えて診断のできる医療従事者を増やしていくこと。また日本では生ワクチン接種によるポリオの発症が続いていたことから、不活化ワクチンへの切り替え要請を、署名活動や世界のワクチン状況地図（日本が先進国と言われる国々のなかで不活化ワクチンへの切り替えを行っていないと一目でわかる）を作製して、2012年の切り替えに貢献した。

医療難民化したポリオ患者へのフォローを日常的に行い、ポリオ根絶を訴える取り組みを続けている。

（推薦者：米本 恭三）

ポリオの会は、1995年にポリオとポリオ後症候群の医療と情報を求めて発足した患者会です。この度、第52回社会貢献者表彰をいただき、これまでの私どもの活動を評価いただきましたこと、大変うれしくお礼申し上げます。

日本では、2012年9月にポリオワクチンが生ワクチンから不活化ワクチンに切替えられ、以後、新たなポリオ患者は発生しません。この不活化ワクチン切替え実現には、生ワクチン由来ポリオ患者とその家族が大変な貢献をしたことと、彼らや先にポリオになった私たちの「自分たちと同じ思いをこれ以上だれ一人させたくない」という思いを、関係の皆様が深く受け止めて下さったことが大きく、感謝しております。しかし世界ではまだポリオは根絶されていません。WHO、ユニセフ、ロータリーはじめ多くの機関、多くの方々がポリオの根絶を目指しています。私たちもポリオを生きている者として声を挙げ続けることで、ポリオ根絶への道のりに少しでも役に立てるようと思っています。

現在、ポリオは日本では、また世界でも、ほぼ根絶された疾患、終わったものとみなされ、医療からも忘れられています。しかし、私たちは今も疾患、障害と戦いながら生き続けているのです。ポリオに罹った私たちの最後の一人が生きている限りポリオの根絶はない、ということを知っていただきたい。そのために声を挙げ続けます。日本の一番若いポリオ患者は今8歳。この子が生を全うするまで医療や疾患の情報、福祉を確保するのは、私たち先にポリオになった者の責務ですし、ワクチン被害未認定、ポリオと診断されないままの方たちの救済と支援を求めるのも当会の役割です。そしてポリオ罹患者の半数以上が数十年後に新たに発症するポリオ後症候群への理解と対

処を求めて活動していきます。

私たちの活動が、世界のポリオ罹患者に役立ち、そして医療と障害福祉の充実につながるよう、この賞を有効に使わせていただきます。

授賞式では様々な分野で社会貢献されている皆様に、学ばせていただきました。

社会貢献支援財団に、篤くお礼申し上げ、今後も活動を続けてまいります。

代表 小山 万里子

〈ポリオ〉「不活化ワクチン」使用と「生ワクチン」使用の国と地域



▲様々な医学会で、ポリオを知っていただくためにブース展示。2018年8月25日日本外来小児科学会で



▲年1回の有志旅行会は会員一同の楽しみに



▲厚労省陳情のアオ君、みづき君



▲ワクチンパレード2017

あさお落書き消し隊



隊長
白井 勇

神奈川県

神奈川県川崎市麻生区の新百合ヶ丘駅周辺地区は、整然とした秩序ある街づくりが評価され1998年に「都市景観100選」を受賞したが、2000年頃から駅前ロータリー、ペDESTリアンデッキの柱や壁が落書きで汚され、来訪者からの苦情もあった。2005年に“新百合ヶ丘駅周辺景観形成協議会”と“麻生まちづくり市民の会”が協働で「あさお落書き消し隊」を設立。“落書き”という小さな犯罪をなくすことが凶悪犯罪の芽を摘むという「ブロークン・ウィンドウズ」理論の考えで「書かれたらすぐに消す」をモットーに活動している。

“年に1～2回大規模で行う落書き消し”と“出前落書き消し”を行っており、大規模な落書き消しは、区のホームページやチラシなどで呼びかけて集まった市民、近隣の企業、地域行政機関などと一斉に作業を行う。多い時は、70名程の人が集まり新百合ヶ丘駅、百合ヶ丘駅、柿生駅等の駅周辺の落書き消しを実施する。「出前落書き消し」は、市民等からの“落書きを見つけた情報”を得て、その都度実施している。その他、落書き消しフォーラムを開催し、専門家の講演など啓発活動も行い、13年の地道な取り組みで、駅周辺から落書きは激減したが、区内では今でも落書きはなくなる。今後も活動を通じて「街に興味をもってもらう」ことで区内の美化と安心安全な街づくりを目指している。

神奈川県川崎市麻生区の小田急線新百合ヶ丘駅を下車し南口に向かうと、美しく整然とした緑に囲まれたバスターミナルの光景が広がります。2000年頃のこのバスターミナル周辺は、ひどい落書きで埋められていたことが嘘のようです。その光景は、整然とした秩序ある街づくりが評価され1998年に「都市景観100選」を受賞した街だとは信じがたいものでした。駅前ロータリー、ペDESTリアンデッキの柱や壁が落書きで汚され、来訪者からの苦情もありました。

「落書き」という言葉で思いつくのは、世界各地の地下鉄の落書きや凶悪犯罪の多発地域での落書きです。ヨーロッパ各地でも、特に駅周辺での落書きは、美しい街の風景とは似つかない光景にがっかりしたこともあります。このような中で、アメリカで犯罪撲滅のために取り組まれたのが、「ブロークン・ウィンドウズ（壊された窓）」理論という考え方です。壊された（割られた）窓をそのままにしておくと、人の監視が及ばない場所だと思われ、軽犯罪が生まれ、次第に凶悪犯罪へと進んでいく。「落書き」の放置も同様な意味を持つ、とした理論です。それを実践したアメリカ各地では犯罪減少の実績が挙げられています。

新百合ヶ丘駅周辺では、2005年に「新百合ヶ丘駅周辺景観形成協議会」と「麻生まちづくり市民の会」が協働で「あさお落書き消し隊」を設立。「落書き」という小さな犯罪をなくすことに取り組みました。「書かれたらすぐに消す」をモットーに活動しています。

年に1～2回大規模に行う「一斉落書き消し」と「出前落書き消し」を行っています。「一斉落書き消し」は、区のホームページやチラシ、最近ではSNSなどで呼びかけ、集まった市民、近隣の企業、地域行政機関などと一斉に作業をします。多い時は、

70名程の人が集まり新百合ヶ丘駅、百合ヶ丘駅、柿生駅等の駅周辺の落書きを消しています。「出前落書き消し」は、市民等からの「落書きを見つけた」という情報で、その周辺の町会の方たちにも参加してもらい、その都度実施しています。その他、落書き消しフォーラムを開催し、専門家の講演など啓発活動も行ってきました。14年の地道な取り組みで、駅周辺から落書きは激減しましたが、区内では今でも落書きはなくなりません。消したところにすぐまた書かれることもあります。

これまでの活動に評価をいただき、表彰いただいたことは、うれしいことですし、励みにもなります。今後も活動を通じて「街に興味をもってもらう」ことで、区内の美化と安心安全な街づくりを目指していきます。

隊長 白井 勇



▲一斉落書き消しに向けての説明



▲ガードレールの落書き消しの前と後



▲透明なパネルの落書き消し



▲ペDESTリアンデッキの壁の落書き消し



▲溶剤を使って落書き消し



▲一斉落書き消しに参加してくれたみなさんと

バングラデシュの人々を支える会



代表
横山 紀子

愛知県

1998年、バングラデシュが100年に1度といわれる洪水被害に見舞われた際、当時、名古屋大学大学院環境医学研究所に留学していたモハマド・アオラド・ホセインさんから、母国の洪水被害の人々の救済をしたいと相談された横山紀子さんは地域の主婦たちとダンボール箱38個分の救援物資の衣料品等を送った。それに先立ち横山さんたちは、寄付金を持って現地に向かい、購入したサリー5,000枚を無償配布した。だが、想像を絶する貧困を目の当たりにし、今後も引き続き支援活動をしていこうと、1999年「バングラデシュの人々を支える会」を設立。農村部にあるシブチョール村の島地区を拠点に、女性の自立支援・子どもの教育支援を目標に活動を始めて20年目を迎えた。

女性たちが経済的に自立するため、2001年に牛牧場を設けたが、数年後、経営が難しくなり、牧場の代わりに女性1人に牛を1頭ずつ、計100頭を供与し、自宅で飼育することにした。結果、個人で牛を所有することで自助意欲がでて、経済的に自立できるようになった。

島地区の親たちは読み書きができないため、子どもたちが貧困から抜け出せるように村で初めての小学校を2011年に建設。当初は13人だったが、2016年には118人まで増え、読み書きや算数、ベンガル語や英語などを学んでいる。

(推薦者：尾張旭市)

「島（中州）地区の貧困女性と児童への支援」

この度、公益財団法人社会貢献支援財団の荣誉ある表彰に浴することができましたのは、当会の活動に関わってきました者として、この上もない喜びであります。また、財団に向けまして推薦していただきました関係諸氏に、心よりお礼申し上げます。

当活動は、1998年、100年に1度といわれる大洪水に見舞われましたバングラデシュから、当時、名古屋大学大学院へ留学して研鑽に励んでいたアオラド・ホセイン氏の要請を受け、被災者への救済として、地域で収集した中古・新衣料や義援金で購入した民族衣装のサリーを現地の農村部（ナラヤングンジ県）に配布しました。

その後、この国の農村部の恵まれない女性と児童とを継続して支援していくため、1999年「バングラデシュの人々を支える会」を設立しました。当初取り組みましたのは、社会的に地位の低い農村部の女性の自立支援としてナラヤングンジ県に「富士シャプラ牧場」を開設し、3名の女性を雇用しました。しかし飼料代が高み、飼養も不十分で、この牧場は事業として黒字化は難しいものでした。牧場に代わる方策として、2005年、マダリプール県で貧困女性に牝牛を1頭ずつ提供する方式に切替えました。この方式により、女性が飼育を通じて得た現金収入は結果として、女性の自助意欲を高めることに繋がり、家の改築や、ソーラーパネルの屋根の設置などによる生活の向上が見えてきました。所期の目標である「100名の女性に、100頭の牝牛を提供する」ことを達成したのを期に、2014年、この支援活動を終了しました。



本土から遠く離れた島（中州）地区では生活のレベルは本土より低く、親のほとんどは読み書きができず、児童の教育は皆無でした。まず親に教育の必要性を認識させることを最優先課題とし、島民との対話から始まり、会を重ねることにより、2011年、小学校を開設しました。ベンガル語の読み書き、算数、英語を教えています。現在、3名の教員により、子どもたちの生活力・人間力の育成を目指した指導をしております。学校の運営は教員・住民の代表・父兄で作る運営委員会が行い、1年生から5年生まで100名の児童が在学しています。雨期になれば洪水のため、道の全部が冠水し、学校は3か月間休校せざるを得ませんが、学ぶことを通じて、例えば、ある女の子は先生になりたいと、将来への希望を持つことができるようになりました。いま学校は教育水準をより高め、政府への移管を目指して努力中です。

現地での活動の展開については、南アジアの気象条件、社会インフラストラクチャー状況、所得格差や、インフレなど、経済政策、人材育成の方針など、さまざまな国際関係のむずかしさに直面する経験の連続でした。

代表 横山 紀子



▲校舎



▲校舎とバナナを背に子どもたち



▲カウンターパート 学校関係者と対話



▲ベッドサイドにみられる生活向上の変化



▲子どもの絵。現地の学校に展示



▲支援女性に牛を提供

社会福祉法人訪問の家



理事長
名里 晴美

神奈川県

重症心身障害児者といわれる重い障害のある人たちの通所施設に関する法律がない時代の1986年に「朋」を開設するところから、法人の運営をスタートした。「朋」は、1972年に始まった横浜市立小学校の訪問学級と母親学級が母体となり、重い障害のある人が学校卒業後も通える場、集える場をとの願いから、横浜市の理解を得て、一部地域住民の反対という試練を経ながらも、同市栄区桂台に全国でも例のなかった重い障害のある人の通所施設として開設した。現在、全国300カ所に及ぶ重い障害のある人が社会参加できる通所施設の先駆けとなった。

現在、訪問の家は横浜市栄区、磯子区、旭区で、重い障害の人たちが地域で暮らす支えとなる13カ所のグループホーム、5カ所の生活介護事業所のほか、相談支援事業、ホームヘルパー活動、診療所さらに日々の暮らしを見守る後見的支援事業や高齢者の地域包括支援事業など、「一人ひとりを大事に」また「誰もが暮らしやすい社会づくり」を理念に、30年を超える法人運営を続けている。

33年前の「朋」開所時から通所されていた55歳の女性が、今年5月に亡くなられました。22年間、仲間と共に暮らしたグループホームでの早朝のことです。言葉を発することは難しく、コミュニケーションは、身の回りのことなどわかりやすい質問に「ウン」と返事をするか、視線や表情などから周囲の人が察知します。日常生活上のほとんどに介助が必要な、いわゆる重症心身障害者といわれる方でした。彼女は、33年という長い年月を、社会福祉法人訪問の家が主に事業を行う横浜市栄区で活動し、暮らしました。車いすで近隣を回る空き缶の回収、わずかに動くひじや手を使って行う缶プレス、作業の下準備をしてくださっていた老人会への定期的な訪問、所属するグループではスタッフやボランティアさんと共に（手添えで）“どら焼き”づくりもしていました。どら焼きを買ってくださった方にお茶をふるまうことを彼女が「やりたい!」と意思表示し、いつしか、朋への来客やコンサートをしてくださる演奏家の方などへのお茶出しも彼女の仕事となりました。グループホームでは、常に15人近いヘルパーがローテーションでケアにあたっています。暮らしの中の、その時々のお気持ちが受けとめられてきたのです。大好きな歌手のコンサートに行く計画も、お母さんが亡くなった悲しみを乗り越える時も、特養で暮らすお父さんとのうれしいうれしい旅行も、ホームのスタッフやヘルパーと一緒に叶えてきました。その彼女との「お別れ会」には、これまでの活動の中でおつきあいのあった地域の方や、ホームに入っていたヘルパーさんなど、本当にたくさんの方が集まってくださいました。みなさんそれぞれが、彼女との大切な思い出、そして、彼女と出会えたこと、共に過ごせたことへの感謝を語られました。

33年前、訪問の家を創設した日浦美智江前理事長は、障害のある人の施設はそこを



利用する一部の人のためのものではない、“生きるということ”、“いのちの大切さ”を感じ考えることができる「文化施設としての社会福祉施設」であると述べました。先述の女性の、言葉でなくとも多くの人と関わり合い影響を与え合っただであろう人生は、訪問の家の歩みが間違っていなかったことを感じさせてくれる、私たちにとってもたいへん輝かしいものです。

この度は、たいへん栄誉ある表彰をいただき、ありがとうございました。この表彰に恥じぬよう、今後とも一人ひとりの気持ち・希望を大切に、多くの人とつながり、思いを共有していく活動を続けて参りたいと思います。 理事長 名里 晴美



▲住宅街に立つグループホーム



▲社会参加活動・クッキー、どら焼き、和紙製品などの自主製品の製作、販売は、地域の方々との交流の機会のひとつ



▲地域のみどりアップ事業できれいにいただいた朋のオープンガーデン



▲缶回収&防犯パトロール「僕らも地域に貢献！」



▲グループホームでの団らん風景・“わが家”でリラックス



▲様々なアーティストがおいでくださる朋ホールでの朋プログラム（写真は中学生によるブラスバンド）

社会福祉法人滝乃川学園



理事長
山田 晃二

東京都

1891年当初、立教女学校の教頭であった石井亮一氏により、日本で最初の知的障がい児者のための社会福祉施設「孤女学院」として東京都北区滝野川に創立、その後、石井氏は職を捨て知的障がい児の教育・福祉に全力を注いだ。明治期から戦前にかけては、現在のような福祉制度は存在せず、公的な支援の無いなかで、名称を滝野川学園（学園）に改名し、所在地も東京都の豊島区、そして1928年に現在の国立市谷保に土地を取得し移転した。この間、学園は石井氏とともに夫人の筆子氏の献身的な努力により支えられた。

学園は石井夫妻の苦勞が結実して公的（東京都）な支援制度が確立される中で、夫妻亡き後もその意志を受け継ぎ、わが国で最初の知的障がい児者のための施設として運営されている。現在、7,000坪程の敷地内の障がい者支援施設、地域支援部、認知症対応型共同生活介護施設などとともに地域での生活の場である障がい者グループホーム20寮ほどの施設で、入居者120名程が施設内で生活している。また通所者150名程とグループホームから80名程が通所で利用。職員約200名、ボランティア延べ500～600名程で運営されている。

この度、社会貢献支援財団より功績表彰を受けたことは、滝乃川学園として大変喜ばしく、学園128年の歴史にまた一つ大きなことを付け加えることができたと思っております。小生としては、たまたまこの時期に理事長という職責を担っていたことを名誉なことと思っておりますが、もとよりこの受賞者は滝乃川学園であり、その歴史を築いてきた歴代の理事、職員、保護者、利用者が一体となって受賞したものと考えております。

滝乃川学園は、1891年（明治24年）に創立者石井亮一により、日本で最初の知的障害児者のための社会福祉施設として、東京都北区滝野川に設立されました。濃尾地震による被災孤児のための「孤女学院」としてスタートしましたが後に知的障害児者の施設として発展しました。1928年（昭和3年）に現在地である国立市に移転いたしました。

現在は、障害者支援施設、地域支援、認知症対応型共同生活介護施設とともに、グループホームを直営、委託含めて20寮を運営し、約350の方が利用されています。特に、一般社会と接しながら生活することを目標としているグループホームの増設は大きなテーマであり直営グループホームの建設を継続的に行っております。重度の方のグループホーム入居も他施設に先駆けて実施しており、車いすの必要な方が生活できるグループホームも現在建築中です。また入所支援のみでなく、月2、3日お預かりする短期入所支援にも児童、成人ともに力を入れております。

昨年12月に、当時の天皇・皇后両陛下の行幸啓の栄誉を賜りました。当学園は平成4年にも両陛下のご来臨の栄を賜っており、平成の最初と最後の障害者施設のご訪問



先に選ばれております。特に美智子皇后は学園にある筆子愛用の「天使のピアノ」と呼ばれる日本の最古のピアノの一つをこよなく愛してくださり、12月の往訪時にも休憩時に讚美歌を2曲弾いておられました。

3年前に神奈川県相模原市において、知的障害者施設で大量殺人事件が起きました。同種、同規模の施設として対応に迫られましたが、「地域に開かれた学園」を目指すという創立者の意志を重んじ、各建屋の安全対策は実施するが、創立以来、正門に門扉を作らないという学園の伝統を守り、敷地内はむしろ今まで以上に解放しようという方向で取り組んでおります。学園の敷地内には矢川という川が流れ自然環境は抜群ですので、この利点を今後とも生かしていきたいと考えています。

理事長 山田 晃二



▲正門



▲児童部若葉寮、常夏寮



▲成人部清風棟



▲生活介護棟



▲短期入所棟

学習サポート・スコラ



神奈川県

「発達障がい」という障がいについてよく知られていない頃から、学校や塾で教えていた教師や講師が対応に苦慮していた経験をもとに、発達障がいに端を発して学習が困難な子どもも通える学習の場（塾）を提供しようと2011年に「学習サポート・スコラ」（スコラ）を開設した。

スコラのマークは、青のハート（心）と黒の頭脳（頭）の両方を育もうとのメッセージが込められ、「みんな学べる、みんな学ぼう」の理念の下で、発達障がいにより様々な困難のある子どもを含め、近隣の小、中学生から高校生や大学生、不登校の生徒、中途退学等により在籍校の無い生徒、日本語を母語としない生徒、さらに社会人までの40名ほどの生徒に12名の講師による1対1の個別学習を中心に保護者、在籍校、医療や相談機関等と連携しながら、より効果的な学習支援を続けている。

（推薦者：NPO 法人なんとかなる）

共同代表

沢木 邦子

学習サポート・スコラは2011年春に発足以来、延べ約420名の生徒に個別学習支援を提供してきました。講師陣は学習指導の経験が豊富なので、さらに発達障がいの生徒一人ひとりへの対応の研鑽と工夫を加えていくことが主な取り組みでした。しかし、徐々に外部の専門機関との連携を模索し拡げ、現在では地域の療育機関、医療機関、相談機関、及び在籍校にも連携を仰ぐことができるようになりました。この道筋は、上記のような公的機関や医療機関、或は公教育の場に、スコラのような民間の小さな団体であっても、“困っている子供たちのためには垣根を越えて手を携え協力していこう”と扉を開けて下さる方々があったこと、同時にスコラに信頼を寄せ個人情報をもとより率直な思いを語って下さる保護者の方々の熱意が支えてくれたからに他なりません。

発達障がいを持つ子供たちの中には、二次障害を起こし不登校や引きこもりの状況にあったり、知的な困難を併せ持ったりするケースも少なくありません。これは当事者と保護者の両方をさらに苦しめます。医療機関や相談機関で発達検査を受けても、せっかくのデータや診断書を活かせず宝の持ち腐れとなっています。保護者はどうやって在籍校の協力や理解を求めれば良いのか、ただ右往左往しています。多くのこうした保護者に寄り添い、この有益な情報を活用して学習面でも“少しずつわかってきた！”“この教科は自信が持てる”等の自己肯定感を持ってほしいと切望してきました。それらが可能になれば、当事者と保護者の喜びや達成感ばかりでなく、地域の活力の担い手となってくれると考えます。

こうして学習塾としての機能と、関連機関を繋ぐコーディネーターとしての支援的機能を融合させた現在のスタイルになりました。



発達障がいへの支援は、地道で長いスパンの活動が必須です。右肩上がりでスナナリ進むことはほとんどありません。思わず涙を流す保護者の姿や、自分はバカでダメな奴だと沈み込む生徒を何度も目の当たりにしてきました。そのたび、不甲斐ない自分たちが申し訳なく気が滅入ってしまうことも何度も経験してきました。しかし今回、表彰式典で多くの支援団体や、自らの危険を顧みる余裕などないまま夢中で他の人々を救った方々の素顔に触れ、大きな活力を与えられました。たとえ非力でも、これからも黙々と活動を継続していきたいと強く思います。そして私たちの活動に賛同してくださる人たちを貪欲に見つけ、骨太な団体にしていきたいと決意を新たにしています。

この度は、大変ありがとうございました。

共同代表 沢木 邦子



▲授業風景



▲授業風景



▲研修会写真

特定非営利活動法人 BOND プロジェクト



代表
橘 ジュン

東京都

創設者ルポライターの橘ジュン氏は、30年近く前から、終電が終わっても新宿や渋谷の街に留まっている少女たちを見て「なぜここにいるのか」が気になり、声をかけ、彼女たちの思いに耳を傾けてきた。話を聴くうちに、少女たちは家にも学校にも居場所が無く、トラブルに巻き込まれていても信頼できる相談相手もいないことがわかる。それを記事にして世の中に発信していたが、目の前にいる少女たちに自分たちが出来ることは何か？と2009年にBONDプロジェクトが始まった。

渋谷を中心とした街頭パトロールやアンケートの実施。必要によってはシェルターでの一時保護。少女たちの「声」を伝えるフリーマガジンVOICESの発行。メールや電話での相談の受付。そして弁護士や行政機関、医療機関などの専門家へ繋ぐ。活動の中心はSNSを使用した相談になりつつあり、LINE相談を週5回行っている。いずれの活動でも本人に直接会って「大丈夫。一緒にどうするか考えよう」が活動の基本。これまでに3,000人以上の少女たちの相談にのってきた。

2006年の頃から「VOICES マガジン」というフリーペーパーを自費出版で発行しています。私はライターで、パートナーでカメラマンのケンさんと2人で街に出て、気になる子に声をかけて話を聴かせてもらっていました。渋谷、新宿の街、バスの中や新幹線でも気になった子がいれば、VOICESを見せながら「こういった本を作っている者なんだけど…」と、声をかけていました。だんだんと深刻な問題を抱えている女の子たちや、聴いて伝えるだけではどうにもならない子との出会いも増えて、相談を受けられる体制を作って活動していこうと、「10代、20代の生きづらさを抱える女の子のための女性による支援」BONDプロジェクトを2009年に設立しました。

終電が終わってから街に出て、気になる子に声をかけていたので、「帰れないけど、今日はどうするの？」と聞くと、家出している子が多かった。親から暴力を振るわれていて家に帰りたくないとか、母親の彼氏が家にいるから嫌だとか家出の理由はさまざま。「夜の街は危険もいっぱいあるから気を付けてね、なにかあれば連絡してね」と、携帯番号を交換しながら、出会いを繰り返していました。

帰れる場所、自分らしくいられる場所、ホッとできる時間…。感覚的な意味合いでの「居場所」を求める少女たち。行くあてもなくどうしていいかわからずに立ち止まり、一人佇んでいる子、家族や人間関係で悩んでいた子、住む場所がない、仕事がない、お金がない、頼れる大人がいないと口にする子もいました。

ある16歳の女の子の言葉を紹介します。

「家出するほど家が嫌なんだよ。家出したいと思わない環境が羨ましい。そんな家庭に生まれたかった」。

親から邪魔者扱いされたり、「生まなきゃよかった」と、言われたり、自分の分だ

け食事が用意されていなかったり、暴力を振るわれたり…。一見、外見や話し方からでは想像もつかないような壮絶な虐待家庭で育った女の子もいます。しんどい、逃げたいと思って家出をすれば、世間では非行という行動に捉えられますが、生きるために家出をする子もいるのです。

「シングルマン」という映画のワンシーンに好きな台詞があります。

「ほんの数回だけ他者と真の関係を築けたことがある。それだけが僕の人生に意味を与えてくれた」。

女の子たちとこんなふうの意味のある時間は過ごせないかもしれないけれど、家族でも学校の先生や友だちでもない私たちが、少しでも安心できる存在になればいいなって思っています。

今回の受賞、本当に感謝しています。活動を続けてきてよかった、と心から思えました。ありがとうございました。 代表 橘 ジュン



▲渋谷の街で活動中



▲女の子の話を聴く橘さん（右）



▲女の子に話しかける橘さん



▲渋谷の街で女の子たちの声をさく



▲アンケートの実施

株式会社パン・アキモト



代表取締役
秋元 義彦

栃木県

(株)パン・アキモトは、秋元義彦社長の父、健二氏が1947年に創業し、2017年に70周年を迎えた町のパン屋さんだが、長期保存できるパンの缶詰を発明し、日本のみならず世界の飢餓地域へ届ける仕組みを作り上げた。きっかけは、1995年の阪神淡路大震災で被災地にパンを届けたが、日持ちしないため3分の2は食べられずに廃棄され、被災者から「柔らかくて長持ちするパンを作って」との声で、秋元社長は試行錯誤を繰り返し、柔らかく保存のきく「パンの缶詰」を誕生させた。

パンの缶詰は備蓄食としてしている場合が多い。備蓄期限を超えた商品の多くが廃棄されている。アイデアとして救缶鳥プロジェクトを思いついた。救缶鳥プロジェクトは、保存食リユースシステムの先駆的な取り組みで、3年間保存できるパンの缶詰の期限を1年～1年半を残して回収し、被災地や世界の貧困国に送る。回収した缶詰の下取り金額、送料等はアキモトが負担している。2018年9月現在、世界に届けられたパンの缶詰と救缶鳥の数は、27万840缶になる。また、食べた後の缶がゴミにならないよう、コップや食器として再利用できるように工夫されている。

救缶鳥プロジェクトの一環でアフリカの子どもたちへ運動靴を贈る運動も始めた。その他、人手不足を見越して外国人研修生を積極的に受け入れるなどの活動も行っている。

この度は受賞の栄誉にあずかり有難うございました。弊社にとって予想外の評価を受け感謝感激です。

また今般受賞した沢山の方々が自己犠牲を惜しまず日夜困っている人の為に活躍されている姿の一端を拝見でき、更に直接意見交換などのできる機会を頂き感謝しています。

文明や経済そして科学の発展の陰でそれに取り残されている弱者が世界中に多数いることは各種メディアやネット情報で知ってはいるものの、何をしてよいかを知らない現代の私たちです。そのような環境下であって、いたたまれなく「一步踏み出した人たち」を大所高所から見つけ出し評価をしていただいている社会貢献支援財団の存在価値は至極貴重です。更に「自由に利用してください」と副賞まで頂いたことは、受賞者にとって何とも言えない清涼感そして普段の苦勞を払拭して「また頑張ろう…」というエネルギーになったことと感謝しています。

我々、食品を造る者にとって、食品ロスは残念そのものです。日本国内での年間食品ロスは約650万トン、そして同じこの地球上で飢餓に苦しみ命を失くす人々が年間10億人もいる問題を見過す訳にはいきません。何かをしたい…、何とかならないものか…？ 知恵を出し合い色々な人達の多面的な協力を得て「救缶鳥プロジェクト」が2009年に生み出されました。備蓄食をその賞味期限前に全国から回収して品質をチェックした後に、食料を必要とする国や地域へ無償で送る活動です。それを一時的



な活動で無くて継続性に注視し、ソーシャルビジネス的な発想を取り入れました。モノ（食品）を大切にする「もったいない運動」と「飢餓」と云う社会課題解決を根底にし、更に事業継続の為に収益を考え変化を余儀なくされていますが、宇宙船・地球号に乗っている同じ人間・特に食料弱者に我々は気配りを続けたいと願っています。

代表取締役 秋元 義彦



▲福島県郡山市に救缶鳥を届けました



▲フィリピンに救缶鳥を届けました



▲ニジェールに救缶鳥を届けました



▲ケニアに救缶鳥を届けました



▲エスワティニ王国（旧スワジランド王国）に救缶鳥をとどけました



国際交流 Seya



代表
船矢 多紀子

神奈川県

横浜市瀬谷区で外国人に日本語を教えて今年で25年を迎えた市民団体。代表の船矢多紀子さんが「地域に暮らす外国人に安心して少しでも楽しく毎日を送ってほしい」との思いから1993年に日本語教室を始めた。当初は、生徒1人に先生が3名で日本語を教えていたが、2年後には生徒の人数も25名ほどに増え、1対1で教えるようになった。生徒の中には、日本語教室で勉強中に突然悩み事を相談してくることもあり、話を聞いてアドバイスをしたり、内容によっては、公的機関に同行したりすることもあった。また日本語教室のほかに生け花や料理教室、クリスマス会、講演会などイベントを通じて互いの交流の輪を広げてきた。

日本語教室は、毎週水曜日の午前中に開催しており、中国、ベトナム、フィリピン、タイなど10カ国の約30人が利用している。20年近く教室に通って勉強している人もいる一方で、日本語能力試験一級・二級に合格して社会で活躍している人も大勢いる。何人かは介護や通訳などの専門職にも就いている。会のスタッフは25名程で、50歳～80歳の主婦や退職後の男性がボランティアで教えている。生徒一人ひとりの学習記録をつけて、何を学習しているのか、これから何を習いたいかなどの情報を、スタッフ全員が共有できるように工夫して活動を続けている。

この度は私どもの活動を表彰して頂き、誠にありがとうございました。その上副賞まで頂戴し、心からお礼申し上げます。

思いがけない受賞だった上に、表彰式・祝賀会に、活動を共にしてきた20名余りのスタッフを全員招待していただけたのは、大変うれしいことでした。帝国ホテルでの盛大で華やかな式典では、安倍昭恵会長から直接表彰状を頂き、内館牧子選考委員長のお話も伺い、この上ない榮譽を皆で共有することができました。続いての美味しいお料理を頂きながらの祝賀会へ参加したことは、無報酬で25年を共に歩んできたスタッフへの何よりの労いでもありました。

活動を始めたきっかけは、「入学を控えた我が娘に、日本のお母さんと同じように、字の書き方・読み方を手ほどきしたい。どなたか教えてくれる人はいませんか？」という話を伝え聞き、その親心に共鳴したことでした。

週1回の日本語教室は平日の午前中ということもあり、学習者は子育て中の主婦が多く、教えるスタッフは子育てを終えた主婦を中心に退職後の男性が数名といったメンバーで続いています。初心者に教えるのが一番難しく、日本語の教え方を専門学校や講習会で学習した者が対応し、教師など社会経験のある者は、日本語検定試験を目標にするなどレベルアップを目指します。

授業に加えて行っているのは、年1回、消防署の協力を得て「防災訓練」を、また月1回、「今日は私が話します」と題して日本語で皆の前で5分位のスピーチをすることです。大勢の前で話す自信が付き、「PTAの役員を引き受けてしまいました！」「自



治会の役員になりました！」といったうれしい報告もあります。

ほぼマンツーマンでの授業では、時折困ったことの相談を受けることがあります。子どものいじめ問題、お姑さんとの行き違い、職場での思いがけない出来事…など。覚えた日本語でそれらを乗り越え、明るくたくましく日本社会にとけ込んで行くのを目にした時はほっとします。最近気になっているのは、夫は会社で、子どもは学校で日本語を覚えているのに、気がつけば自分は片言のみで読み書き会話は全然ダメ。家族や社会から取り残されてしまっているという場合です。若いうちは同国人とのおしゃべり、情報交換で不自由は無くても、年を取るにつれ孤立して行きます。「日本で暮らすからには日本語を覚え、安心して老後を送ってほしい」と改めて強く念じずにはられません。

この度の受賞では、全国の素晴らしい活動をしておいでの方達とお会いできました。私たちもお仲間に入れていただいたことで誇りと自信を持ち、今後の活動の何よりの励みとなりました。ありがとうございました。

代表 船矢 多紀子



▲週1回の学習風景



▲子供連れ歓迎



▲年1回の防災訓練



▲日本文化体験



▲一品持ち寄りパーティー

認定特定非営利活動法人リボン・京都



理事長
小玉 昌代

京都府

1979年から続く民間有志によるカンボジア難民救援会で、慈善バザーを行っていた婦人グループが活動を拡大したため、そこから92年に独立した団体。難民キャンプや途上国で縫製を指導する活動を主に行っている。

寄付される古着の中に正絹等の着物が多くあったが、難民がそのまま着るわけにもいかず、用途を考える中、ボランティアをするデザイナーが、ほどいた着物の生地を洋服に仕立て直す方法を提案。当初は団体ボランティアの手でリフォームし販売されていたが、難民キャンプには、国連から寄付されたミシンがあることを知り、それならば難民の自立にもなると、90年からカンボジアを皮切りに洋裁技術の指導を開始した。

①国内で寄付された着物の生地を、ボランティアがほどこき、洗い張りをし、型紙と完成見本品を付けて現地に送る。②指導者の下、パターンに沿って現地の人が縫う。③厳しい品質検査を経て、洋服に生まれ変わった製品を買い取る。④日本に送り返され、販売され、寄付や活動資金にするといった流れになっている。

団体のモットーとして、ただ買い与えるのではなく、難民の支援がモノではなく、技術指導でと、途上国の女性や若者の精神的経済的自立を支える活動を行っている。

この度、社会貢献支援財団が当会の40年にわたるボランティア活動を評価して下さり、表彰していただきました。当会から4人出席いたしましたが、財団の素晴らしい企画と、暖かいおもてなしに心より御礼申し上げます。

40年のボランティア活動の中で、途上国の生活困窮者の支援活動や当会の運営などで困難もありましたが「得るより与える方が幸いなり」をモットーに頑張ってきました。この度のご招待を受けて、ありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。今回の受賞者の中に人命救助や障害者の方がたの支援など緊急で勇気のいる立派な社会貢献をされた方がたがいることを知り敬服いたしました。

当会の「リボン・京都」は人間が生活するうえで、衣食住が必要ですが、その衣に関わる支援をしています。1979年に当会はカンボジア難民救援会（現NICCO）の婦人グループとして活動し、日本全国から古着を集めカンボジア難民に送りました。その中に日本の着物が送られてきましたが、着物は民族衣装で難民に役立たないので、送らずに残しておきましたところ、ボランティアのデザイナーが着物から洋服を制作することを婦人グループに指導し、完成した作品をリボンウェアと名づけて、デパート等のチャリティバザーで収益を得ました。それを難民に送る古着の船賃に充当いたしました。

この活動がマスコミに取り上げられ、不用になった着物が日本全国から続々と当会に送られてきました。この洋裁技術をタイとカンボジアの国境の難民村の女性難民に



訓練することを考えました。難民村にはすでに国連から足踏みミシンが寄贈されていたので、着物地を教材に洋裁専門家と私（現プロジェクトマネージャー）が現地へ赴き、ブルーテントの中で赤土の上にビニールを敷きその上にベニア板を置き、机替わりにして洋裁指導をいたしました。完成した作品には出来栄に応じて奨励金（仕立代）を支払いました。そしてその作品を日本に持ち帰りチャリティバザーを催し収益を救援活動費に充当しました。カンボジア難民が自国に戻れるようになり、その後、引き続きこの支援の方法で、ベトナム、スリランカ、イエメン、ヨルダン、ラオス、ルワンダと7か国の生活困窮者の女性と若者に日本の着物を教材に洋裁技術指導を行い経済的・精神的自立を目指す支援をしています。

今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。 理事長 小玉 昌代



▲カンボジア難民への洋裁指導



▲ラオスでの裂織の指導



▲イエメンでの洋裁指導



▲ヨルダンでのクッションの製作



▲ルワンダでの洋裁始動



▲ニューヨークでのファッションショー

パソボラサーくる虹



代表
藤川 敦志

福岡県

「パソコンの指導を通じて、視覚障がい者のバリアフリーを支援するとともに、社会参加と自立の促進に寄与することを目的としたボランティアサークル」で、1998年に発足した任意団体。キャッチフレーズは「あなたの力をだれかのために、小さな勇気が大きな力に」。2019年4月現在、200名近いユーザー（視覚障がい者）と50名を超えるサポーター（晴眼者のボランティア）会員によって運営されている。

活動内容は、毎月第二日曜日の午前と午後の2回に分けて、福岡市市民福祉プラザ内の研修室・ボランティアルームで、視覚障がい者のパソコン・スマートフォンの利用、操作方法について学習をしている。指導は主に、スキルアップしたユーザーが担当し、サポーターが補助するのが本会の特徴。自宅の音声パソコンのセットアップやソフトのインストール、パソコンのトラブルで助けが必要なときは、その分野を得意とするユーザーやサポーターが、1回2時間をめどに、訪問サポートで対応している。

その他、会員同士の交流として、メーリングリストの配信、忘年会やハイキングの開催などを通じて、視覚障がい者の社会参加と自立の支援を実践している。

この度、社会貢献者表彰という大変名誉ある賞をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。安倍昭恵会長から表彰状をいただいた時、ずっしりとした重みとともに、あらためてこの賞の重みを感じさせられました。

懇親会では受賞者の皆様のお話を伺い、驚きと感動を覚えました。こんなすばらしい方々の中に私たちも選んでいただいたのだと、とても嬉しく、誇らしく感じました。

パソボラサーくる虹は、パソコンの指導を通じて、視覚障がい者のバリアフリーを支援するとともに、社会参加と自立の促進に寄与することを目的に活動を続けてまいりました。

1998年10月、福岡市の空に虹がかかった日に、パソボラサーくる虹は誕生しました。カタカナ・ひらがな・漢字を組み合わせた団体名は、パソコンを使って文字入力を練習するための課題にもなります。以来、創立者の塚原幸雄氏と、その遺志を受け継ぐ人たちによって活動は継続され、2018年には創立20周年を迎えました。2019年7月現在、会員数は260名を超えています。そのうち210名が視覚に障害を持つユーザー会員、50名が晴眼者のサポーター会員です。

活動の中心は、毎月第2日曜日に開催される研修会です。キーボードの配列からメールの送受信、ネット検索、Excelの操作、スマートフォンの活用など、四つの部屋に分かれ、10台以上のノートパソコンを用いて行なわれる研修会には、午前・午後合わせて約70名が参加します。指導は視覚障害者のベテランユーザーが中心となっており、視力のあるサポーターがバックアップに当たります。本会でパソコンの使い方を



学び、スキルアップしたユーザーが新入会ユーザーの指導にあたるのが本会の特徴です。

目が見えなくても、見えなくなっても、パソコンやスマートフォンを使うことができる。メールをやり取りできる、書類を作成して印刷することができる、ニュースを読んだり、ショッピングを楽しんだり、音楽を聴いたりすることができる。その嬉しさ、その感動を伝えるには、視覚障害者本人による指導が最も望ましいと考えています。

この度の受賞を胸に刻み、目が見えなくても IT 機器が使えることが当たり前になる日まで、活動を続けてまいります。

今後とも、何卒宜しくお願い申し上げます。

代表 藤川 敦志



▲年に1回の忘年会



▲春のハイキング



▲総会風景 資料はメールで配信メモは録音でスマートフォン入力



▲研修会風景



シスター 井上 千寿代



インドネシア

神学を学び、英語や宗教など日本で教育に力を注いだ後、1991年にインドネシアに渡り、アメリカ人のシスターたちとともに聖心会のコミュニティを発足させ、現在まで、貧困家庭の子どもの教育に尽くしてきた。ストリートキッズたちが小物づくりなどの仕事をするコミュニティをつくり、彼らの日々の問題、将来の生き方、正義や権利について話し合い、ともに学びながら彼らの教育を助けた。その後、FAKTA (Forum Warga Kota Jakarta) という NGO を作り、大きな社会問題となっていた強制撤去や教育の問題を解決するため、自立と組織作りができるリーダーを養成するリーダーシップトレーニングを始めた。

また子どもと母親に本に触れる機会を持って欲しいと、10ヵ所の地域で移動図書館を始めた。

インドネシアを日本の多くの支援者となつなぎ、多岐にわたる支援活動をしている。

(推薦者：海外邦人宣教師活動援助後援会 (JOMAS))

この度、社会貢献支援財団よりの受賞を、心から感謝いたしております。その式典に参列させていただきましたお陰で、多くの方々の、活動を伺うことができました。人命救助、若者たちの教育、自然保護、身体不自由な方々の援助など、どのお話しを伺っても、人々が共に生き抜く力強さに感銘を受け、私自身も大きな力をいただきました。

1991年から、聖心会は、インドネシアの特に教育の機会に恵まれない若者の教育のためにということで、2人のアメリカ人と、日本人の私との3人で、ジャカルタの一角で生活を始めました。まず地元の様子を勉強しようと、イエズス会経営のジャカルタ・ソーシャル・インスティテュート（後日、有志による FAKTA という NGO に移行）を訪問し、そこで、スタッフに英語を教えながら、ジャカルタの状況、特に貧しい地域の人々について、学びました。私は、すぐ、そのセンターにやって来るストリートキッズと関わりを始めました。彼らを担当していた弁護士ティゴールさん、アリさん (FAKTA) は、式典に参加いたしました。そして、女性の弁護士ティティさんも、共に担当していました。まず、彼らが教えてくれた大原則がありました。それは、『ストリートキッズの生活のリズムを邪魔しないで、徹底的に尊敬する事』でした。即ち、いつでも彼らが来たら受け入れる、いたずらをして、どこかへ逃げて行ったら、後を追わない…ということでした。

私は、アリさんたちと、彼らと何をしたらいいか相談した結果、何か売れるものを作らせてみようということになり、バティック人形のブックマークから始めました。週に1、2回、NGOのセンターに集まって、15歳前後の若者、10人ぐらい、少し後になって、10歳前後の子どもたち15人ぐらいが、参加しました。ブックマークから、写真立て、メモ箱、ファイルケースと彼らの技術も伸びて来ました。出来上がったものは、日本の友人の助けて、地下鉄、銀座4丁目の【愛のセール】という店で、数年間、売っていただきました。

普段、バスに乗って、歌うたいをしたり、物貰いをしたり、一日の食べるためのお金を稼ぐのが精一杯で、貯金の感覚はありませんでした。各自、何点作ったかによって、作業の半分の額を彼らにあげていました。インドネシアの最大のお祝い日は、イスラム教では、1か月の断食の後、Idul Fitri というレバランのお祝いです。この手

芸のおかげで、彼らは、自分の作業分の残りの半額分を受け取ります。これは、今までにない金額を、受け取ることになった訳で、大喜びでした。

タルノ君は、6万ルピア（約600円）受け取りました。彼は、早速6万ルピアの皮の靴を買って、戸棚の上に乗せて、しげしげと眺めて自分ながらに感動していました。10万ルピア受け取った、子ども好きのピルジョ君は、近所の小さい子どもたちに、飴玉を買って一人一人に分け、500ルピアずつお金を配っていました。3千ルピアもらった、9歳のエディ君は、お米を買い、私が袋を作り、バンドンの家に帰って行きました。Idul Fitriの日は、みんなで車を借りて、デュファン（ミニディズニーランド）へ行きました。新しいシャツと、新しい靴を履いて勇んで行きましたが、帰りには、みんな、足が痛い、靴を脱いで、肩にかついで帰ってきたわけです。

結局、エディ君はバンドンに行っても家が見つからず、3日ほどして、お米を抱えて、がっかりし、ジャカルタに戻ってきました。数年後、バンドン駅で弟と出会い、丁度彼の誕生日に、お母さんがお皿を洗っているところにエディ君が現れたということです。

28年後のかつての子どもたちは、今、しっかりしたお父さんになっています。当時20人ぐらいいたのですが、その中で、マンスール君は、事故で片足を亡くしたり…誤って人を殺し、1年の刑務所生活がありました。その後、プサントレン（イスラムの寄宿学校）で、中学・高校の過程を勉強し、21歳で卒業し、大学に入り、出たり入ったりしながら10年かかって2018年5月に大学法学部をめでたく卒業しました。いつか、弁護士になって、困っている人々を助けたいという希望もっています。

上記の手芸のバティックの材料を始め、フロレス島の飲み水…東チモールとフロレス島のトラックや車、子どもたちへの本、アチェ、ジョグジャ、西ジャワの地震や津波の時の衣類、文房具、移動図書館のミニバス、学校建設の費用（シメル島、フロレス島、東チモール）、無料診療の薬代など、多くのご援助を日本の方々からいただき、とても多くの方々に喜んでいただきました。みなさまにこの多くの方々の感謝の気持ちと、インドネシア聖心会一同からの心からの感謝の気持ちをこの機会にお伝えさせていただきます。本当にありがとうございました。



▲25年前のストリートチルドレン マンスール君とエディ君



▲25年後のストリートチルドレン マンスール君とエディ君 大学を卒業しました



▲ボンドック・ボチャのダンスでごあいさつ



▲東ティモールの小学校にスケッチブックや文房具を配っています

瀧谷 昇



奈良県

JICAの前身である海外技術協力事業団（OTCA）が実施したコロナ計画により、1974年、25歳の時に勤務先の義肢製造の会社から1年間アフガニスタンに義肢作りの指導教官として派遣された。帰国後、1980年に株式会社奈良義肢を設立。同国へ刺繍糸を贈る活動をしている西垣敬子さんの誘いで、孤児院の足のない子どもたちに義足を制作するために26年ぶりに同国を訪れたことを契機に、2002年から「アフガニスタン義肢装具支援の会」として活動を開始した。

現地で一度に20人分ほどの「型取り」を行って、日本で制作し、現地を訪れ「装着」作業と次の「型取り」を行う。一人ひとりのカルテを作成し、成長に合わせてメンテナンスをする。これまでに約230人に渡すことが出来た。しかし2014年頃から情勢によりビザ発給の許可が下りず、完成した義足5名分を届けることができていない。

現在、会としての活動は終了しているが、個人で活動の再開を模索している。

この度は、荣誉ある社会貢献者表彰を賜り感謝に絶えません。この賞にふさわしいか自問自答しています

アフガニスタンで義足支援の活動を始めるきっかけは、私個人の家庭環境が無縁ではありませんでした。幼い頃、両親と死別し養護施設で育った私は家庭を知らずに大人になり、義肢装具と言う天職に出逢いました。そしてOTCA（国際援助機構）が進めるColombo計画（中央アジア医療援助）に参加して義足の製作技術指導をするため、首都カブールで1年間を過ごしました。平和な時代でしたが貧困とイスラムの慣習（身障者になるのは因果応報だといった考え方）で病院には裕福な人しか来られないのです。日本でも戦前には同じ様な状況であったと聞いています。

この義足の製作技術指導は実のところ、帰国する頃ようやく援助物資（機械や材料3トン）が届き、任期は終わってしまいました。ただ、アフガニスタンの人々の暮らしには感動を覚えました。同僚たちは自宅に何度も異邦人の私を暖かく招き入れ、アフガニスタン料理をご馳走してくれました、大家族で暮らす彼らを見て、「家族の為に働くのだ」と、技術を教える代わりに人生を教わりました。

悔しさと、人生を教わった感謝だけが残り「いつか」は恩を返したいと思っていましたが、機会は突然巡って来ました。宝塚アフガニスタン友好協会を主宰されている西垣啓子さんから、カブール孤児の義足製作を依頼され、ゴールデンウィークを使って26年振りにカブールに帰ることができました。かつての美しい高原の国際都市の面影はありませんが、自分の気持ちをはっきり判り、ボランティアを始めるなら今だと、その決心はシニアボランティア（他力本願 JICA 頼み）で果たすと考えていたこと自体、間違いであると気付かされました。

同時多発テロがありタリバン政権が崩壊して、アフガニスタン義肢装具支援の会を発足後、様々な人から資金援助を受けて15年間活動ができたのは、製作ボランティア（義肢装具士養成校生徒の若者）、義足をトランクに詰めて運んでいただいた同行ボランティア、義足部品の提供していただいた義肢装具の同業者、コサージュの販売益を提供して下さった宗教家や主婦の集まりの皆様のおかげです。

現在は治安状況が悪くなり現地訪問が叶いませんが、アメリカ、アフガニスタン政府、そしてタリバンの3者の協議が実現するニュースも良い方向に向かっています。

最後にこの表彰に恥じぬ様、活動再開に向けて頑張りたいと思います。



▲義足を装着しての歩行の様子



▲カブールゲストハウスでの義足の調整



▲現地で採型したギプス型と次回の調整のソケット部



▲日本で完成した義足を分解してトランクに詰めて運び現地に組立します



▲日曜日 義肢装具を学ぶ学生さんと共に製作（日本）

齊藤 朋子



東京都

2009年に獣医師となって以来、野良猫の不妊手術を専門に行う病院を開き、これまでに行った手術は16,000頭を超える。繁殖制限により望まれない命を生み出さないことが、犬猫の殺処分ゼロに繋がると、ボランティア団体との連携により、着実に目標達成に向けて活動が行われている。また、全国各地で行われるボランティア医師による犬猫の不妊手術への参加や、他県からの出張依頼手術にも応じている他、行政や臨床獣医師にも理解を深める為の働きかけを行い、術式の普及・技術指導も行う。

2010年には国内における殺処分ゼロの目標に向けて、NPO法人ゴールゼロを設立。理事長に就任し、都内の小学校などで、動物を通じて命の大切さを教える教室を開催。奄美大島の世界遺産登録に向けて行われた野猫駆除に対しては、6万以上の署名を集め、定期的に島を訪れ地元での聞き取りなど現地調査を経てその実態を明らかにするなど、野生動物を含め、ペットと人間が共生できる社会に向けた活動に尽力されている。

(推薦者：山口獣医科病院 院長 山口 武雄
公益財団法人 どうぶつ基金)

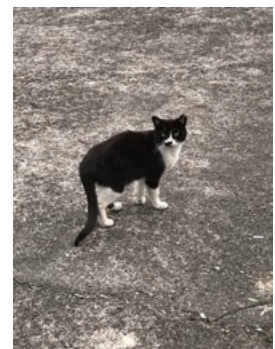
飼い主のいない猫に低料金で不妊去勢手術をする。これだけをひたすらに10年間続けてきました。手掛けた猫の手術数は累計16,000匹を超え、周りの獣医仲間も増えていきます。人間の身勝手により、不幸にも殺処分される犬や猫の数を、少しでも減らしたいと思う、ただそれだけの獣医師として当たり前の行動が、こうして表彰していただけたことは本当に嬉しく、また改めて自身を振り返り、どれほど多くの仲間を支えられて、ここまでやってこられたかを実感する機会でもありました。

現在は、鹿児島県奄美大島で、生態系保全のために邪魔者にされたノネコと呼ばれる猫を救う活動も加わり、大変な面もありますが、起こす行動に信念が伴えば、人は応援して下さることを日々実感しています。

授賞式では、「私ひとりにできることは小さいかもしれないけれど、何もしないよりはしたほうがいい」、そんなひとたちが世の中にはいて、本当に素晴らしい活動をされている方々と知り合えることができました。招待した仲間たちにも世の中の素晴らしい活動の数々を知ってもらえ、皆、感動していました。

推薦者および選考委員のみなさま、財団のみなさま、心温まるたくさんのおもてなしに心から感謝申し上げます。

この受賞を励みに、かけがえのないペットたちが社会の一員として、人と共に豊かに暮らしていける社会になるよう、これからも犬猫の殺処分ゼロをめざす活動を続けてまいります。



▲不妊去勢手術がすんだサクラ猫



▲奄美大島に開院した専門病院



▲奄美大島の地元 FM に出演



▲猫はボランティアによって捕獲



▲ボランティアへの指導も行う



▲去勢手術の様子。猫の視線が…



▲健康チェック



▲耳のなかの汚れなどもチェック

有限会社赤間工業



取締役
赤間 徹

福島県

赤間徹さんは、福島県浪江町で建設業を営み、配管工事などで原発の維持管理に関わっていたが、東日本大震災後発生後、事業は開店休業状態で、現在は廃炉作業に携わっている。

原発の事故後、避難先で動物を引き取るができないという事情から多くの犬や猫が飼い主とはぐれ、ケガや病気で毛が抜け落ち、痩せこけた状態で露頭に迷っていた。赤間さんはもともと動物好きだったことや、これまで原発を支えてきた立場という自責の念から、こうした犬や猫を放っておかず、保護してはインターネットなどで新たな飼い主を探し、引き渡してきた。

赤間さん自身も被災者であり、避難先の郡山市から浪江の自宅へ通いながら犬や猫を見つけては保護し続け、自身の貯金なども切り崩しながら餌代などを捻出してきた。避難指示が解除された今も、家族は避難先に留まっているため赤間さん一人、自宅で犬猫の面倒を見ている。これまでに新しい飼い主に引き取られた犬猫は1,000頭余り。

また、定期的にアライグマなどを捕まえて、弘前大学で放射能の汚染量を計測してもらい、汚染度の増減なども記録し続けている。次の世代のために、町の復興のために、自発的にこうした地道な努力を続けている。

この度は荣誉ある賞を拝受し、心より御礼申し上げます。

福島県浪江町で建設業を営み、配管工事などで原発の維持管理に携わってきました。

2011年、東日本大震災による福島第一原発事故後、全町避難を強いられた浪江町で、飼い主に置き去りにされたり・事故後生まれた犬猫たちを、自身も被災者ながら避難先の郡山から浪江町の自宅に通い、保護し続けてきました。

保護した犬猫たちには不妊手術をして世話をしながら、協力をしてくれるボランティアさんたち・支援者の方がたのおかげで、新たな里親に繋げています。これまでに獣医師と共に、1,000頭余りの命を救う活動を続けています。

2013年9月より始まったTNR活動、そして弘前大学の放射線汚染量の計測の手伝いもしています。その結果・浪江町では犬猫たちに関するトラブルは殆ど有りません。しかし8月15日に帰還困難区域にて、首と目を怪我し棄てられた犬を保護しました。明らかに人によってキズ付けられたものでした。今もこの様な事が、日常茶飯事に起きているのも現実です。

「自身が出来る事をやり続ける、動物達とのより良い共生のために…」そして町の復興の第一歩のためにも、これからも地道に活動して行きます。ありがとう御座いました。

赤間 徹



▲完成した犬舎



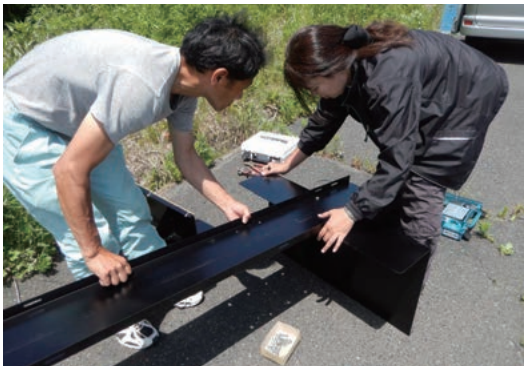
▲ドッグランの芝生貼り



▲震災後放浪していた犬を保護し、その後飼い主の所へ帰ったところ



▲震災時、自宅を開放し犬の居場所を作った時の写真



▲猪対策のため、鉄製の給餌器を組み立てて設置するところ



▲猫の捕獲機を設置しに行くところ



▲避妊してR (リターン) した猫達の給餌器



▲保護時、栄養不足で皮膚がボロボロになっていた子

特定非営利活動法人宮崎野生動物研究会



理事長
岩本 俊孝

宮崎県

1973年から動物園副園長・宮崎大学職員らのボランティア達が、本土では一番上陸・産卵数が多い宮崎県の一ツ葉海岸周辺の25kmにわたり、アカウミガメの調査を開始した。活動が報道されたことで、市及び県が天然記念物に指定し、ウミガメの卵の盗掘が徐々に減った。海岸清掃を続けながら、上陸・産卵巣数、ふ化率、親ガメに標識をつける個体調査等を50年近く続け、それらの調査結果を毎年県や市に報告してきた。カメにつけた標識を見た中国人船員からの手紙等が届けられ、そうした情報から、冬にウミガメは東シナ海に生息していることも明らかにした。さらに、ダム・護岸建設の影響や離岸流により、200m程あった砂浜が5m幅に侵食されていく海岸線の現状や原因、及びそれらのウミガメへの影響に関して、国土交通省に報告するなど海洋環境の保護にも尽力している。

ボランティア会員は退職後の人から学生等まで年齢層も幅広く、ニホンカモシカやニホンザル、イノシシなどにも調査依頼が拡大している。このように、発足以来、希少動物や絶滅危惧種の調査や保護を48年に亘って、世代交代をしながら活動を繋いでいる。

(推薦者：宮崎県教育委員会)

一宮崎野生動物研究会の活動の経緯と今後の抱負一

宮崎野生動物研究会は1973年から、動物園職員や宮崎大学の職員・学生らのボランティアが、本土では一番上陸・産卵数が多い宮崎県の一ツ葉海岸周辺の25kmにわたり、アカウミガメの調査を開始しました。その後、今日まで一貫して、宮崎市周辺の海岸を中心としてアカウミガメの調査を続けて参りました。

活動の開始当時、研究会の活動が新聞等で報道されたことで、市及び県が天然記念物に指定し、それを機にウミガメの卵の盗掘が劇的に減り始め、約40年に亘り盗掘はゼロの状態が続いています。また、研究会では海岸清掃や、上陸・産卵巣数、ふ化率、親ガメに標識をつける調査等を続け、それらの調査結果を毎年県や市に報告してきました。市や県では、それらの結果をアカウミガメ産卵地の保全等の施策に活用してきました。

宮崎市周辺の海岸では、ダム・護岸建設による河川からの土砂供給の減少や導流堤建設の影響等により、昔は200m程あった砂浜が現在では5m幅に侵食されています。研究会は、そのような海岸線の現状や、原因、及びそれらのウミガメへの影響に関して、国土交通省にも報告するなどして、海岸環境の保全にも協力しています。

標識調査の一つの成果として、アカウミガメに装着されている標識を見た中国人船員からの手紙等がいくつか届けられ、そうした情報から、冬季にウミガメは東シナ海に滞在していることを突き止めました。またアカウミガメは、大体2年に一回程度宮崎県の海岸に回帰し、約4か月間の繁殖期のうち約2～3週間おきに3回程度、産卵



上陸すること等も明らかにしました。また、今年度初めて、アオウミガメの上陸・産卵を1件確認し、今後のウミガメの上陸状況の変化についての新たな課題も得たところ です。

ボランティア会員は退職後の人から学生等まで年齢層も幅広く、ニホンカモシカやニホンザル、イノシシなどにも調査依頼が拡大しています。このように、本研究会は、発足以来、希少動物や絶滅危惧種の調査や保護を48年に亘って、世代交代をしながら活動を繋いできています。

この受賞を機に、活動範囲をさらに広げたり、また現在行っている各種の調査・ボランティア活動を深化させたりすることによって、宮崎県における自然環境保全に尽力していきたいと思ひます。

理事長 岩本 俊孝



▲市民グループのビーチクリーン活動に協力



▲カメ調査の写真



▲夜間の調査活動



▲アカウミガメ 砂被せ中



▲砂辺を迷走して帰海できなくなったカメを救出し海に帰す様子

中津 賞



大阪府

大阪・堺市で動物病院を経営する中津獣医師は、傷ついた野鳥を手当てし自然界へと戻す活動を1974年から行っている。ガラス窓や自動車にぶつかったり、農業用ネットに絡まる等、主に人の生活に関係して傷ついた野鳥を治療し、リハビリを行い野生へ戻している。同年、大阪府知事より、野生鳥獣救護ドクターの指定を受け、年間140羽前後の傷病野生動物（主に野鳥）を受け入れ、無償で治療し、うち65%以上を放鳥、これまでに救護した数は6,000羽を超える。

また、タンカー流出事故で油まみれになる油汚染海鳥の救護ができる人材養成の講習会を私費で毎年開講し、既に800名を超える修了生を得ている他、2008年にはNPO法人野鳥の病院を開設、代表として、年に6回、獣医師・動物看護師・一般市民を対象に野生動物の救護が出来る野生動物リハビリテーター養成講座を毎年開講し、これまでに120名が修了している。

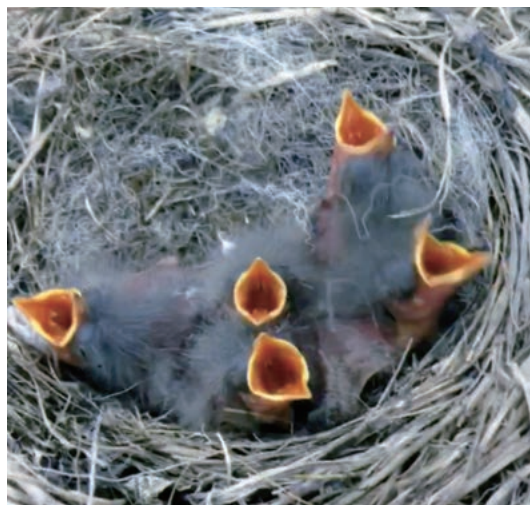
この度は社会貢献者表彰の受賞の栄を得まして、大変ありがたく思っています。私は獣医師として、堺市に動物病院を1972年に開院しました。大学院の下宿時代には狭い部屋一杯に鳥かごを積んで飼育していたのは今となっては良い思い出です。鳥に関する大学の授業は、食鳥としてのニワトリの伝染病だけでした。ペットとしての鳥類医学に関する授業は皆無で、開業しますと沢山の飼鳥たちが診察に訪れます。飼育経験はありましたが、学問的な裏付けのない状態でした。これではいけないと思って、海外の文献や報告を読み漁り、次第に確実な診断と治療ができる様になりました。また評判を聞きつけて、沢山の野鳥たちも持ち込まれてきました。飼い主がいるわけではなく、すべてボランティア活動として入院させて治療し、野外復帰訓練をして放鳥できるまで看護します。

こうして得た治療法の改善や入院中の栄養補給法の実績はその都度、学会で報告してきました。傷病野生動物の救護といっても野鳥が99%です。年間の救護例は140件を超える状態が数十年続きました。ツバメの巣がヒナを入れて落ちることがあります。この時は一度に5羽のヒナが入院します。食欲旺盛で夜中も給餌しないとイケません。また、不法に捕獲飼育しているメジロなどが警察の摘発で、数十羽が搬入されることもありました。飼鳥の治療で得た知識を野鳥に応用したり、野鳥の救護を通して得た情報を飼鳥に応用していくことで一層治療効果がよくなりました。入院鳥は動物看護師が熱心に看護し、衛生管理をしてくれます。この方達の御苦勞も忘れてはなりません。

台湾で開催されたミネソタ大学ラプターセンター教授陣による鳥類医学の4日間研修コースを受講して、一気に世界的な最先端の鳥類医学と整形外科手術を修得できました。鳥の理学療法にも積極的に取り組んで、現在では翼を骨折した鳥でも、飛行が

再開でき、野生復帰症例が急に増えて来ています。小型発信機を装着して放鳥後の行動・生態の追跡調査も行なっています。タンカー事故時の油汚染水鳥の救護技術を持つボランティア養成にも私費で積極的取り組み、大阪では800名近い方が修了されています。

今回の受賞を機にいっそう精進し、社会に貢献したいと存じます。有難う御座いました。



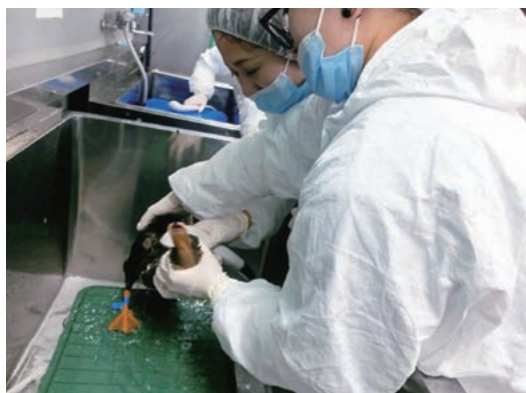
▲トラックの荷台の下に作られたセキレイのヒナの巣



▲頭を強打して救護されたオオコノハズク



▲実習に先駆けて、体各部の測定の仕方をデモンストレーションしているところ



▲油汚染水鳥救護講習会でカモを洗浄しているところ



▲野生動物リハビリテーター養成講座の様子



▲野生動物リハビリテーター養成講座終了式にユニフォームを着て記念撮影

菅野 正巳／直子



北海道

シマフクロウという翼を広げると180cmにもなる日本最大のフクロウを保護する活動を夫妻で行っている。シマフクロウは絶滅の恐れが最も高い絶滅危惧A類に指定されており、北海道東部、サハリン、千島列島南部だけに生息しており、道内ではおよそ160羽いると推定されている。

1992年に東京から北海道に移住し、シマフクロウの調査を行って任意団体「シマフクロウを増やす会」を結成し保護活動を行ってきた。2008年にNPO法人シマフクロウ・エイドを設立し、シマフクロウが生息できるように生態を保ちながら保護するという難題を試行錯誤しながら給餌活動、モニタリング、植林、パトロール活動を行っている。またこうした保護活動が人間の住む環境をも守ることを訴え、次世代を担う地域の子どもたちへ環境教育や講演会などの啓発活動を行っている。

(推薦者：田中 元介)

この度は、私たちの活動に光を当てていただき感謝申し上げます。

そもそも菅野正巳がシマフクロウの保護活動に関わることになったのは、偶然出会った1冊のロシアの紀行文「ビキン川にシマフクロウを追って」でした。当時のロシアの豊かな自然や野生生物の生き生きとした様子に魅かれ一気に読み、文末には、シマフクロウは日本の北海道にもいると書かれてあり、是非会ってみたいと強く思いました。その後、休暇を利用して北海道の東部を訪ねるようになり、やがてその存在が大きくなり移住するまでに至りました。現地の研究者を訪ね、浜中町はまだ調査がされていないから、是非やってみるといいとアドバイスをもらい、地図を片手に森を歩く日々が始まりました。情報は全くない時代でした。3か月後、出会いはいきなりやってきました。目の前の樹にとまっているシマフクロウの姿は、何か直視をしてはいけないような神々しさがあつたことを昨日のように覚えています。先住民が村を守る神様として崇めていたことは後に知りました。記録用に撮った写真はブレていましたがとても気に入っています。

誰かに案内されてではなく、自分で試行錯誤しながら森を歩き続けた結果出会った、このことが、現在の活動の原点となっています。シマフクロウは、カメラマンやガイドに人気の鳥であるため、生息地保護のため長年情報が一般公開されず、保護の担い手育成も進まない状況がありました。このことを危惧するようになった頃から、私も活動に関わるようになり、今後、多様な人が関与していくであろう生息環境の保全に



ついても気になるようになりました。私は以前東京都の国定公園内の施設で自然に親しみ行動する人づくりを進めるインタープリター（通訳者）の仕事をしていました。普及啓発がシマフクロウ保護業界に不足していました。特に関係地域への啓発が重要だと考え、地域にフォーカスした活動を展開すべく NPO 法人シマフクロウ・エイドを設立しました。一次産業の基盤となる「環境」を住民主体で持続的に保全し循環するモデルを作り、他地域へ波及していくことを目標にしています。NPO 活動は11年目となり子どもたちの学習を通じ大人が変わりつつあります。シマフクロウはじめ全てのものにプラスに働く仕組みを今後も一步一步進め、みんなで守ってきた、としていきます。

この度の受賞で、他の受賞者様の活動を拝見し交流する機会をいただきまして、異なる活動の中に地球に生きるものとして共通する信念のようなものを感じました。自団体の活動に活かしてみようと思う発見もありました。この度は本当にありがとうございました。

菅野 直子



▲観察を続けるシマフクロウ雄成鳥



▲モニタリング調査取り纏め作業



▲生息地パトロール



▲給餌用活魚の防御対策



▲シマフクロウを指標とした出前授業（野外）



▲シマフクロウを指標とした出前授業（室内）

社会福祉法人札幌報恩会



理事長
山下 太郎

北海道

重度の知的障がい者を対象とした施設で、創設者は“不遇なこの子どもたちをもらい子と思って、退園後も目を離さず手を携え、親として面倒をみていく”ことをモットーに、1918年に創設され、昨年、創立100周年を迎えた。現在は500名近い利用者に対し、24時間365日対応する施設が47,000㎡の広大な敷地に3ヵ所、通所等の施設が4事業所ある。また、敷地外にも5事業所を展開し加えて、グループホームも市内に17ヵ所、総勢80名の地域での暮らしを支援している。利用者は北海道内、主に札幌から280名程が通所し、220名程が居住し、彼らを350名のスタッフが支えている。地元町内会との交流も盛んで、認可保育園も施設内に有する。北海道有数の福祉施設として、利用者のニーズに対応しながら事業を展開し、長きにわたり活動を続けている。

(推薦者：筒井 哲雄)

「ほうおん」の由来

創立者小池九一さんは、長野県松本市の出身、生家の倒産により、満10歳で（紙問屋へ）10ヵ年の丁稚奉公に出され、先方の願いで3年間のお礼奉公も済ませ、明治33年5月、23歳で単身、新天地、北海道を目指されました。確たる当てもなく、函館から稚内まで、各地を巡り、道中、紹介をいただいた空知支庁長宅を訪れ、それが、奇遇な出会いとなり、書生として、わらじを解き、雇員、日本赤十字社の業務、やがて、本庁に呼ばれることになりました。その間、山田支庁長ご夫妻の媒酌で、家事見習いの林スミさんと結婚、家庭を持つことができました。

明治41年、道内にも児童教護施設が設置されるにおよび、小池九一さんが主事、スミさんが助手を任命され、社会福祉事業に本格的に取り組むこととなりました。当時は、名称が「感化院」、院長が警察部長兼務と言った状況で、せつかく良育しても、退院後も警察の監察下におかれ、九一・スミさんが満足できるものではありませんでした。小池九一さんは、大正3年、院長になられ、名称も「札幌学院」へと改称されましたが、自らの、家庭生活を基盤とした訓育、そっと、あずかり、そっと、お返しするという夢の実現には、程遠いものでした。

大正4年8月、藻岩山のふもとに土地を購入し、「報恩園」と名付け、敷地の中央には「報恩」碑を建立しました。そこには、渡道15年を経て、小池家を復興できたのも、「天恩」「地恩」「君恩」「国恩」「親恩」「師恩」「友恩」の賜物として、永久に報恩感謝の道を歩む覚悟が刻まれております。この地に、大正7年11月30日に私立児童教護施設「札幌報恩学園」が誕生しました。

「感謝の言葉」

社会貢献者表彰を賜り、財団の皆様、審査員の皆様、推薦者の筒井様に、心より厚く御礼を申し上げます。素晴らしい2日間でした。

理事長 山下 太郎



▲大正7年 私立感化教育機関「札幌報恩学園」の誕生



▲日中活動「園芸班」の様子



▲2018年9月23日 報恩まつりの様子（法人キャラクター報和くんとともに）



▲札幌報恩会大運動会での綱引きの様子



▲2018年10月31日 社会福祉法人札幌報恩会創立100周年記念祝賀会

特定非営利活動法人まきばフリースクール



理事長
武田 和浩

宮城県

1999年に宮城県栗原市の自然と動物に囲まれた環境の中でスタートした不登校児のための寄宿型フリースクールで、生きづらさを抱えた人々を迎え入れてきた。ニーズに合わせ、障がいを抱える青年たちの生活の場のグループホームや家族と暮らすことの出来ない子どもたちのためのファミリーホーム、自立準備ホームや就労の場として高齢者介助デイサービスの運営なども行っている。また農作業を体験し成果物を販売するなど循環型の環境作りに力をいれていて、人も資源も循環型のソーシャルコミュニティを作ることを目指している。職員35名中約7割が当事者から回復したスタッフとして利用者を支えている。

(推薦者：特定非営利活動法人ローゼベル)

高度経済成長の波に押されるように、出来ること、優れている事に意味と価値が凝縮されていると勘違いして、人に認められ評価されるために必死になって夢に向かって取り組んだ青春時代！ その当時の私は、競争の中で人と比べて優劣を判断し、勝ち続けることでしか自分を肯定し安心と満足を得られるすべはなかった。そんな人生観に行き詰まり、破綻したのが18歳の時である。そのタイミングで出会ったのが親身に寄り添ってくれた牧師さんだった。「あなたの存在そのものが、何にも代えがたく、素晴らしい！」この出会いが私を180度方向転換させてくれた。そして心に決意した。「自分のように若くして生きること悩む若者の良き相談相手になろう！」それから18年の準備期間を経て、36歳の時に「まきばフリースクール」を開設し、今年で満20年の節目を迎えている。

このタイミングで社会貢献活動の表彰を受けて、まず心に浮かぶのは36年前に手を差し伸べてくれた恩師の牧師さんへの感謝の思いである。不登校やひきこもり、児童虐待、様々な生き辛さを抱えた若者たちの痛みや悲しみを繋がる力に変えて、安心出来る心の居場所を作っていこう！ 一人一人がかけがえのないユニークで素晴らしい人なのだから！ 20年前に、この想いと願いだけで船出した手漕ぎボートは、何度も荒波に飲まれ破船しそうになりますが、そんな状態であるにも関わらず、今溺れかけている人に手を差し伸べ九死に一生を得ます。自分より困っている人を助けて、助けられたのはこっちの方でした！ そんなことを繰り返しているうちに、フリースクール、高齢者介護、ファミリーホーム、自立援助ホーム、自立準備ホーム、障害福祉サービス事業所、グループホーム、ふれあい牧場など7つの事業所、それぞれがそれぞれを必要とし生かし合う関係の中で循環して成り立っています。



「誰かに助けてほしい私たちは、誰かに助けてほしいそのまま、誰かの助けになれるだろうか」「ここにいれば、何かできる。誰かに会える」生きることに行き詰まったら、ここがあるよ！ あなたはあなたで素晴らしい！ 私を変え、そして「まきばフリースクール」を成長させてくれた一人一人との出会いに感謝したい。そしてこの表彰は、それら一人一人へのエールだと思う。かつて、できる出来ないが人の優劣を決めるとして生き難さを負ったが、人の価値に優劣はない、私の欠けを満たしてくれるのはあなた。あなたに出来ないことでも私なら出来ることがある。二人が力を合わせればもっと優しくなれる。そんな関係、そんな場所をこれからも作っていきたい。

理事長 武田 和浩



▲まきば文化祭女装コンテスト



▲春・田植え



▲デイサービス利用のおばあちゃんと職員の赤ちゃん（一緒に昼寝）



▲フリースクール開設当初



▲夏・恒例のフリースクール網地島キャンプ



▲社会的養護・ファミリーホーム愛子園の避難訓練

特定非営利活動法人パンキャンジャパン



理事長
眞島 喜幸

東京都

すい臓がんの患者やその家族を支援するために、アメリカの非営利団体パンキャンの日本支部として2006年に設立されたNPO法人。設立当時、5年生存率がわずか5%の最も難治性がんであるすい臓がんは、罹患者数＝死亡者数ともいわれ、有効な抗がん剤も少なかった。長期生存者が少ない難治性がんだが、高齢化に伴い年々罹患者が増加している。

このような状況を変えるため3つのミッション「すい臓がん研究者・医療者の支援」「すい臓がん患者・家族への支援」「すい臓がんについて希望を創る」を掲げ活動している。具体的には、患者・家族が必要としている情報を提供し、一緒にサポートのためのサービスを探す、ホテルコンシェルジュのような活動PALS（パルス）、ドラッグラグ（欧米で使用されている標準治療薬が日本で承認されるまでの遅れ）解消のための署名運動や政策提言活動、最新の治療法の情報提供、顕著なすい臓がん研究者へ「パンキャン賞」の授与、すい臓がん撲滅チャリティイベント「パープルストライド」やセミナーの開催などを行っている。また、全国の専門医、医療機関、日本膵臓学会などと連携し、2020年までに倍の生存率をめざしている。

（推薦者：田辺 毅彦）

この度は、すい臓がん患者支援団体パンキャンジャパンとして、大変光栄なる社会貢献者表彰を受賞させていただきましたこと、社会貢献支援財団ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

近年、がん研究が進み、米国では全がん種5年生存率が75%に達したと発表されました。しかし過去40年間、5年生存率が一桁台にとどまっているすい臓がんは依然として9%です。受賞の際に安倍昭恵会長より「主人の父親もすい臓がんでした」と告げられ、日本人にはすい臓がんが非常に多く、粗罹患者率は米国の倍であることが思いだされました。我々が活動を始めた当時、米国で承認されたすい臓がんの新薬が日本の患者に届くまで5年以上かかっていたため、その承認遅れの解消を厚生労働省に訴えるロビー活動を続けてきました。余命3か月と宣告された患者・家族にはあまりにも不条理な世界でした。いまやドラッグラグも解消されつつありますが、患者が欧米の新薬、特にゲノム医療に関連した医薬品を使うには課題が山積しています。

いまや世界はゲノム医療の時代に突入し、すい臓がん患者も遺伝子変異にマッチした治療を受けることで生存期間が標準療法の2倍に伸びることが米国臨床腫瘍学会において発表されました。それを受けて米国NCCN診療ガイドラインは改訂され、転移性すい臓がん患者は、がん遺伝子パネル検査を受けるよう推奨されました。しかし、年に何回も改訂される米国NCCNガイドラインとは異なり、日本のすい臓がんガイドラインは3年毎に改訂されるため、今年6月に保険償還された新薬ですらガイドラインで迅速に取り上げられないため、患者はその恩恵をすぐには受けることができま



せん。また、米国のように転移性すい臓がん患者に推奨された「がん遺伝子パネル検査」も6月に保険償還されましたが、できる施設は限られており、11か所しかない施設以外の患者がパネル検査を受けることは非常に難しく、自分のがんの遺伝子変異が何かすらわからない、遺伝子変異にマッチした治療などもまったく受けられないなど、新しい問題が山積しています。

新薬の早期承認を訴えてきた弊社にとり、新しいゲノム医療時代の到来とともに新しい問題解決に取り組むことが求められていると痛感させられたこの3か月でした。この度の社会貢献者表彰の受賞を糧として、「すい臓がん撲滅」に向けてさらなる努力をする所存です。

皆様のご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

理事長 眞島 喜幸



▲情報提供 パープルリボンセミナー
2009年より、国内の主要な病院施設と共催で開催し、信頼できる情報提供を行っております



▲研究者支援 パンキャン賞
2012年より、日本膵臓学会に、国内の優秀な研究者を選出していただき、同学会開催期間内で、会場にて5名の研究者に毎年賞を贈呈しています



▲鎮魂 パープルライト
罹患者 年間4万人⇔年間死亡者4万人の、難治性がんであるすい臓がんは毎年新しい遺族が増えています。旅立った方への鎮魂と、今病氣と闘う方への応援と言う意味で、2015年よりパープルライトを開催しています



▲啓発 PurpleStride リボンセレモニー



▲膵癌ワークショップ2018

清水 孝夫



宮城県

石巻市の友好都市である中国温州市から受け入れた水産加工技術研修生から、日本語を学びたい、習慣や文化も知りたいと要望され、寺子屋式の教室を開いたのが活動の始まり。1999年2月にボランティア団体をつくり、20年間に亘り日本語教室の活動を通して在住外国人の自立と社会参画を支援している。

元教師や定年した人たちがボランティアで日本語を教え、これまで約500人を超す修了生を輩出している。修了生は、石巻市の外国人相談員や外国人児童生徒の学習サポートとして活躍している。在住外国人が年々増加していることから、設立当初からの教室に加え、3年前に石巻市の要請で外国人技能実習生を対象とした教室（みなと荘教室）を開設し元教師などの8名のボランティアが熱心に教えている。

清水さんは、教室の手配や季節ごとのイベント企画、行政との連絡調整のほか、悩みや相談にのるなど親代わりの存在となっている。また、在住フィリピン人やインドネシア人、中南米諸国出身者のコミュニティづくりにも力を注ぎ、共同して出身国における地震、津波、台風などの災害義援金募金活動にも積極的に取り組んでいる。

今後も、外国人にとって石巻市が暮らしやすい街であり、実習期間を終えて帰国した外国人が日本に来てよかったと思えるような居心地の良い多文化共生の街「石巻」にしていきたいと考えている。

(推薦者：石巻市復興政策部地域振興課長 五十嵐 秀彦)

このたび社会貢献者表彰という大変素晴らしい賞を受賞させていただき誠にありがとうございました。

1999年2月に国際サークル友好21というボランティア団体を立ち上げ、在住外国人のための日本語教室を開設して以来、今年で丁度20周年という節目の年にこのような賞を受賞できましたのも何かのご縁かもしれませんが、私にとって、とても嬉しい出来事となりました。しかも帝国ホテル東京での表彰式典に妻や義弟夫妻まで参加させていただき、おかげさまで人生最大の思い出となりました。大変恐縮いたしますと共に衷心より厚く御礼申し上げる次第であります。社会貢献者表彰の受賞は、これまで一緒に活動を続けてきました仲間やスタッフのご協力のおかげであり、何よりも家族の理解と支えがあったからで心から感謝をいたしております。

今回、社会貢献者表彰式典に参加させていただき、国内外の様々な分野で活躍されている多くの方々と出逢い交流できたことを誇りに思っております。「井の中の蛙大海を知らず…」で石巻に生まれ育った私にとって世の中の広さを知るよい機会となりました。また、このことは、私の心の大きな財産となり、今後の活動の励みとなりました。表彰式における受賞者懇談会をはじめ、表彰式典・祝賀会などの企画、演出はとて素晴らしい、何もかも至れり尽くせりで、社会貢献支援財団の皆様のご尽力と温かいお心遣いにとて感動いたしました。心からご慰労と感謝そして御礼を申し上げ

とっとり・民話を語る会



会 長
小林 龍雄

鳥取県

前身の鳥取民話研究会の活動を通して、民話を語り継ぐことのすばらしさから、平成12年に語り活動へとシフトした。これまでに鳥取市の小学校ほぼ全てで民話を語り、保育園で、毎月2カ所ですべて3、4、5歳それぞれのクラスに分けて民話を語り、高齢者や障がい者施設、公民館の生涯学習では多いときで100名もの聴衆の前で語り部4、5人で約60分間民話を語っている。

語り部は一人平均30話を語る事ができて、聞き手の年齢に合わせた語り口で、話の背景、方言や民話用語、いろり・釜・蓑といった生活用品の実物を見せたり、模擬したりして、事前の準備も怠らない。

国の文化は、地方文化の礎にある。現在7名の語り部会員と共に、伝承文化の継承と拡大に務めている。

(推薦者：小林 龍雄)

第52回社会貢献者表彰をいただき、心より御礼申し上げます。晴れやかな会場で、志の高い方々と面談ができたこと、改めて「社会貢献」の意味を噛み締めています。

社会には明暗があり、それなりの役割が必要と思いますが、表彰された皆さんは貢献を当然のこととして語りあっている、その名誉というか誇りに感動しました。「民話の語り活動」が、どれほどの社会貢献に値するのか、受賞にあたり、安倍昭恵会長、内館牧子表彰選考委員長、来賓の笹川陽平氏のご挨拶を聞きながら思考しました。

「むかーし、むかし、あるところに…」と、小学校児童を主体にしながら、高齢者に対しても民話を聞くことが回帰効果や、孫とのコミュニケーションに資することを願って活動しています。

民話は民間説話の略称といれて、文字の無い時代より常民の生活感が「自然との関わり」「人間との関わり方」「教え」など、笑い話・動物昔話など面白く、また怪談・幽霊話など怖い話として、口承で伝えられてきました。日本人にとって貴重な伝承文化で、後世につないでいかなければならないことと確信しています。しかし、年月の経過は、生活様式・世界観の違い、方言の衰退、語り部の減少など、「ふるさと」が遠くなって行くのを感じています。しっかりと活動を継承すること、口承文芸の原点を見失わないことの大切さを再認識させていただきました。

鳥取県は、とっとり・民話を語る会（鳥取市）、倉吉民話の会（倉吉市）、ほうき民話の会（米子市）、東西4サークルで、全国唯一連合会を組織しています。15年が経ちましたが、ジャンルとしては地味な活動なので、表彰は遠いものと思っていました。

このたびの表彰は、私たちの今後の活動に大きな力を与えていただいたと同時に、希少価値になりつつある全国の仲間、語り部にとりましても大きな励みとなります。しっかりと、次の世代へ継承すべく、切磋琢磨してまいりますので、よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

会長 小林 龍雄



▲湖山長者伝説の地 青島で語り 一般市民対象



▲伝説の湖山池管理事務所ホール 一般市民対象



▲小学児童語り 囲炉裏を模擬説明



▲小学児童民話語り 1～3年生学校多目的ホール



▲小学児童語り 2年生かさ地蔵



▲鳥取県文化祭 トリアート ふるさと民話の集い 一般市民対象



▲鳥取市公民館老人会語り 地域住民対象

一般社団法人山形バリアフリー観光ツアーセンター



代表理事
加藤 健一

山形県

加藤健一さんは21歳で筋ジストロフィーを患い、32歳で自力歩行が困難になり車椅子生活を送るようになった。そして障害者の社会生活にいかにも多くの制約があるかを実感した。健常者であった経験と障害者としての経験両方の視点を社会に活かして、障害者をもっと理解してもらうための環境づくりをしたいと考えるようになり、2014年に有志を募りボランティア団体「Gratitude」を結成した。

障害者等用駐車場の塗装作業（ブルーペイント大作戦）や、バリアフリー交流会などを通じて、障害者の外出促進と健常者・障害者間のコミュニケーションの活性化を目指して、意欲的に活動を行っている。この活動から障害の有無にかかわらず、誰もが不自由なく好きなところへ行けて、好きなことができる「観光支援」をするべく設立したのが「一般社団法人山形バリアフリー観光ツアーセンター」。障害者への対応可能な設備が整った場所を探して、行ける場所へ出かけていくのではなく、行きたい場所に行き、やりたいことに挑戦してもらう機会を作りたい。そのためには何が必要で、どのような環境を整える必要があるのかを考えることが活動の目的。バリアフリーの情報発信、提供事業研修会、講演会、疑似体験会の開催、高齢者及び障害者への旅行支援、各種旅行、イベント等の企画運営事業、福祉器具、介護用品などの販売やレンタル、車いすでも履きやすいフライングジーンズの開発、バリアフリーコンサルタント等を行っている。

2015年には、加藤さん自らが車椅子で県内初のパラグライダータンデムフライトに挑戦し成功。2016年には日本で唯一、車椅子によるパラグライダーフライトができる施設を誕生させ、国内外からフライト体験希望者を受け入れている。

この度の社会貢献者表彰式典に際しまして、大変名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。このような名誉ある賞を受賞することができましたことは、これまで共に活動してきたメンバーにとっても大変嬉しく、これからの活動の励みになります。心より感謝御礼申し上げます。

僕は今、筋ジストロフィーという難病と闘いながら現在は車椅子生活を送っています。生活する中で不自由な所はたくさんありますが、諦めなければたくさんの夢が叶う事を多くの方に伝えながら、車椅子生活を送る中で自らの経験を現代の社会に生かそうと、様々な挑戦を行なっています。

2014年に、心のバリアフリー化を通して「誰もが住みよい街」を作るため、ボランティア団体「Gratitude」を結成し、障害者等用の駐車場の塗装作業『ブルーペイント大作戦』やバリアフリー交流会、講演会や研修会を行なって来ました。

さらに活動を通して障害の有無に関わらず、誰もが気兼ねなく外出できる環境を整えたいという思いから2016年4月、一般社団法人 山形バリアフリー観光ツアーセンターを設立。全国から障害者や高齢者の旅行のサポートを行い、県内のバリアフリー観光を推進しています。また、日本で唯一車椅子によるパラグライダーのフライトが



できる環境を整備し、全世界から来県される方々の「空飛ぶ夢」を叶えています。そして今年世界でも前例のない事を成し遂げました。それは、筋ジス患者として世界初となる車椅子でのパラグライダーソロフライトです。

また、2018年2月には、株式会社 夢源を設立し、就労継続支援 B 型事業所 LUNA を運営、障害者の就労継続支援として、日本で唯一となる車の洗車やオイル交換などの軽整備を中心とした作業提供を行うなど、一人一人が可能性を発揮でき、一般就労に結びつけることを目的とした就労支援を提供しています。

さらに現在は、東京大学先端研と南陽市と連携する Sky Village 企画運営、バリアフリーを実現する地域振興フェス Sky Festival など様々なプロジェクトを進めています。活動を通し子どもたちに夢と希望を届けながら、これからも『ひとりのハートが世界を変えられる』の理念の元、様々なことに挑戦を続け、障害の有無に関わらず、誰もが住みよいインクルーシブな社会を目指し活動を続けてまいります。

この度は誠にありがとうございました。

代表理事 加藤 健一



▲講演活動



▲ブルーペイント活動



▲車イスでのパラグライダーフライト体験



年度別表彰分野・受賞者数の実績

分野	年／回										小計
	1回 昭46	2回 47	3回 48	4回 49	5回 50	6回 51	7回 52	8回 53	9回 54	10回 55	
人 命 救 助 等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
そ の 他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小 計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ				②笹川記念会館						

分野	年／回										小計
	11回 昭56	12回 57	13回 58	14回 59	15回 60	16回 61	17回 62	18回 63	19回 平元	20回 2	
人 命 救 助 等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
そ の 他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小 計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	②笹川記念会館										

分野	年／回								小計	受賞者 合計	
	21回 平3	22回 4	23回 5	24回 6	25回 7	26回 8	27回 9	28回 10			
人 命 救 助 等	101	82	34	15	47	21	27	16	343	3930	
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6	72	91	
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32	274	1626	
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42	384	2385	
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12	79	270	
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19	104	364	
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20	298	1134	
そ の 他	13	7	7	0	0	0	0	0	27	1658	
小 計	337	339	230	104	149	136	139	147	1581	11458	
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9			
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル					

分野	年/回	29回	30回	31回	32回	33回	34回	35回	36回	小計	受賞者 合計
	平11	12	13	14	15	16	17	18			
第一部門 緊急時の功績		6	5	6	8	5	4	5	2	41	
第二部門 多年にわたる功労		14	15	11	12	13	11	11	18	105	
第三部門 特定分野の功績 (海の貢献賞)			4	7	8	8	11	9	9	56	
(国際協力)			2	2	1	3	3	4	2	15	
(ハッピーファミリー)			2	2	1	0	2	0	0	7	
(21世紀若者)			0	0	2	1	3	1	2	9	
子ども読書推進賞						3	3	3	3	12	
小計		20	24	24	28	29	29	28	32	214	11672
開催日		11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20		
式典会場		④	①	④東京全日空ホテル							

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。

平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。

平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。

平成15年度より子ども読書推進賞を新設。

分野	年/回	37回	38回	39回	40回	41回	42回	43回	44回	45回	小計	受賞者 合計
	平19	20	21	22	23	24	25	26	27			
人命救助の功績		9	13	11	11	8		3	9	0	64	
社会貢献の功績		33	35	34	34	39		36	35	47	293	
特定分野の功績 (海の貢献賞)		1	2	3	5	2		2	0	0	15	
海への貢献の功績									3	2	5	
子ども読書推進賞 表彰式：6/26 会場：虎ノ門パストラル		1									1	
東日本大震災における 貢献者表彰 表彰式：5/1 帝国ホテル							128	12			140	
小計		44	50	48	50	49	128	53	47	49	518	12190
開催日		11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25	12/1	11/30		
式典会場		④ ANA インターコンチ ネンタルホテル				⑤帝国ホテル						
												12190

平成19年度より分野名を変更。子ども読書推進賞は最終回。

平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。

平成26年度より特定分野の功績（海の貢献賞）は海への貢献の功績に変更。

分野	年/回	46回	47回	48回	49回	50回	51回	52回	小計	受賞者 合計		
	平28	28	29	29	30	30	31					
人命救助の功績		9		11		11	8	4	43	43		
社会貢献の功績		11	51	17	53	29	32	33	226	226		
小計										269		
開催日		7/1	11/28	7/21	11/27	7/6	11/26	7/22				
式典会場		⑤帝国ホテル										
												12459

平成28年度より年に2回式典を開催。

都道府県別受賞者内訳

県名	第51回 までの累計	第52回 受賞者	受賞者数
北海道	660	2	662
青森県	180		180
岩手県	216		216
宮城県	392	2	394
秋田県	124		124
山形県	155	1	156
福島県	177	1	178
茨城県	201		201
栃木県	149	1	150
群馬県	243		243
埼玉県	472	1	473
千葉県	401	2	403
東京都	1,175	7	1,182
神奈川県	626	4	630
新潟県	261		261
富山県	144		144
石川県	143		143
福井県	205		205
山梨県	135		135
長野県	201		201
岐阜県	216		216
静岡県	312	1	313
愛知県	316	2	318
三重県	164		164
滋賀県	100		100

県名	第51回 までの累計	第52回 受賞者	受賞者数
京都府	211	1	212
大阪府	492	3	495
兵庫県	518	1	519
奈良県	112	1	113
和歌山県	144		144
鳥取県	91	1	92
島根県	111		111
岡山県	307	1	308
広島県	415		415
山口県	272		272
徳島県	176	1	177
香川県	196		196
愛媛県	150		150
高知県	75		75
福岡県	548	1	549
佐賀県	132		132
長崎県	268		268
熊本県	231		231
大分県	127		127
宮崎県	73	1	74
鹿児島県	141		141
沖縄県	164	1	165
その他	100	1	101
合計	12,422	37	12,459

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計

※県名は、受賞者居住地の都道府県名 その他は居住地が海外

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計として
足した数。

役員・評議員一覧

2019年9月1日現在

会 長	安 倍 昭 恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副 会 長	内 館 牧 子	脚本家 東北大学相撲部総監督
理 事	浅 野 加寿子	NHK エグゼクティブプロデューサー
理 事	天 城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理 事	犬 丸 徹 郎	株式会社 和光 取締役執行役員
理 事	澤 井 俊 光	一般社団法人 共同通信社 編集局総務
理 事	増 岡 聡一郎	株式会社 鉄鋼ビルディング 専務取締役 COO
理 事	屋 山 太 郎	政治評論家
監 事	篠 原 由 宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監 事	中 村 元 彦	中村公認会計士事務所 所長
評 議 員	石 井 宏 治	株式会社 石井鐵工所 取締役社長
評 議 員	井 沢 元 彦	作家
評 議 員	ロバート キャンベル	国文学研究資料館 館長
評 議 員	久 米 信 行	久米繊維工業株式会社 取締役相談役
評 議 員	徳 永 洋 子	ファンドレイジング・ラボ 代表
評 議 員	永 嶋 久 子	株式会社 資生堂 元取締役

(五十音順)

公益財団法人 社会貢献支援財団

設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6 クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<https://www.fesco.or.jp>

社会貢献者の記録

2020年3月15日

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION